陸羯南の思想の魅力について

（2008年11月28日　受理）

人間科学講座　本　田　逸　夫

On Some of Kuga Katsunan's Inspirational Moral and Political Ideas

(Received November 28, 2008)

Kyushu Institute of Technology　HONDA Itsuo

はじめに

ご紹介いただいた本田です。私が四半世紀以上前に大学院生として羯南の文章を読み始めたころは、羯南という人物は日本史を専門とする研究者以外の人にとっては無名に近く、彼の故郷であるこの弘前でも、一般にはその名前以外のことはあまり知られていなかったのではないかと思います。その数年後、彼の政治思想をテーマとした論文を書いてからしばらくして、私も当地を訪れたことがあります。その当時は羯南に関わる史跡など、まったく整備されておりませんでした。ところが、ご存じのようにとくに最近はそうした整備も進むとともに彼に関するさまざまな催しが盛んに行われています。その様子を見聞きし、弘前及び青森で行われている羯南関係の充実した展示に接し、そして、今また、彼を正面からとりあげたフォーラムに参加することになって、「今昔の感にたえない」という表現がピッタリと当てはまる思いです。

さて私は、政治思想史という分野の一介の研究者として主に全集などの活字資料を通して羯南とつきあってきた者にすぎません。詩歌にたいして音痴で正岡子規についても門外漢ですし、ここ弘前の歴史や人物に関しても詳しくありません。羯南が天職としたジャーナリストとしての経験や実践的な問題意識にも、欠けております。そんなわけで、錚々たる他のパネリスト及び講師の方々、またよく勉強されている会場の方々にくらべて、自分は場違いではないかと感じています。

その一方で、私のように他の方とは違う畑、つまり専門分野の者、かつ今日、羯南に関心をもつような方々の年齢は高めなので、――今、フロアを拝見しても、かなり若い方も一部におられますがご年配の方の比重がやはり高いようです――それにくらべて、若い――といっても、あくまで比較的に若いということでしょうが――そういう者の見方を紹介するのも意味がある、という趣旨のことを主催者の方からうかがいました。

ただし同時に、九州にいるのになぜ羯南の研究をしているのか、との質問も今回、いただくことがあり、そんな疑問をもたれているようだなと感じました。そこで、これに関連して少しお話ししておきたいと思います。

たしかに、私は福岡県の大学に勤めておりますし、お手もとのパンフのパネリスト紹

介のところにも書かれているように、熊本県の生まれです。

しかも、実は羯南は九州人を批判的にみておりまして、私の立場は難しいものになるようです。彼が明治三十年の初めに表した長編の論説「奥州人と九州人」によると、奥州――つまり東北――では戦乱が皆無となった江戸時代のみならず戦国時代においてすら合戦が少なかったが、逆に九州では各地域の諸勢力が割拠対立し対外的な緊張もあって「有事」に慣れ、殺伐とした気風が江戸の太平の世でも失われなかった。そうした気質の差異の結果として、明治維新でも九州人が活躍し東北人を圧倒する結果を生んだ。彼の言葉を引きますと、「維新の革命が九州人より促されて竟に奥州人を推倒したる所以のもの、恐らくは勤王愛国の心より出づるに非じ。全く二百余年間抑塞せられたる殺伐の気、之を致したりといふべし」とされています[1)]。

武家政権の下で長く逼塞してきた「勤王愛国」の精神がいわば本来の自己を回復し徳川時代末期の国家的危機において薩摩長州などの「志士」たちに担われて維新を実現させるにいたった、と一般には説かれていた。そうした当時の支配的なイデオロギーにたいして、実情はそうではなく、九州人は長年抑圧されながらも失われなかった「殺伐の気」によって権力を手に入れ、反対に温和な東北人の方は不遇の地位に転落させられたのだ――羯南は、このように主張しているとみてよいでしょう。

さらに彼は、両者の気風を数点にわたって対比しています。最初の三点だけ紹介しますと、

「（一）奥州人は何れの地方人をも初対面に於て既に朋友視する。
　　九州人は自己を除の外、何人をも信ぜず、総べて油断なく相接す。
（二）奥州人は路傍の人の困難を見ても気の毒に思ふこと多きが如し。
　　九州人は朋友の困難などには余り頓着せざる風あり。
（三）奥州人は他人を押し倒して自己の位地を取ることを敢てせず。
　　九州人は自己名利の為には他人の事情を顧みざる進取の気象あり。」

とくに最後の対比は、ユーモラスというよりは皮肉が鋭くきいていて、けっこうキツイですね。ただし、羯南は、自分は奥州人だが、だからといって奥州人をもちあげて九州人をおとしめるつもりはない、として、元禄年間に出版された、現代でいえば県民性論みたいなもの[2)]ですが、その記述を引用して上記の説を補強しています。

実は以上とかなり共通する内容の主張が、この約五年前の明治二十五年三月に三回にわたって新聞『日本』に連載された「東北及西南」という論説でも行なわれています。この「西南」とは九州とともに四国や中国をも指しており、薩長土肥を中心としてその周辺の地域も含めた言い方のようです。

この論説の背景についてふれますと、この時期は、藩閥と政党の対立がとくに激化し、二月半ばに臨時総選挙が行なわれたのですが、当論説でも言及されているように選挙前に高知と佐賀に保安条例の一部が施行されましたし、品川弥二郎内相が警察力などを用いた激しい選挙干渉、――民党勢力の弾圧ですね――これを行なったために各地で騒擾が起り、その結果二十数名の死者まで出ました。こうした干渉は政府の内部でも伊藤博文の反発を招き、この論説が発表された数日後には品川は辞任にいたっています。

羯南は、当時のこうした「選挙擾乱」あるいは、より一般的に激しい諸党派の対立抗争が西南地方では特徴的だが東北には存在しないとして、その理由を西南人の気質から

説明するわけです。そして、ここでの彼の価値判断は五年後にくらべると露骨または直裁であり、文献の引用などないかわりに彼自身の身近な体験によるものらしい、ディテール、つまり具体的な細部をともなう観察が引照されています。すなわち、西南人士は「余程の不才子」であっても「機」「略」という言葉――いわば権謀術数のタームですね――これらを「朴納なる口もて人前に吐く」ことをはばからないようだ、というのです。すると、羯南が元来もっていたこうした観察と見解が、五年後には文献的な実証の体裁をもとりつつ、九州人に的を絞って、あらためて述べられたということなのかもしれません。

ともかく、ここで彼は、同時代の西南人について次のように述べています。すなわち、彼らは、温和で利害に淡白な気質の東北人とは対照的に、戦国時代のような権謀術数が慣習ないし嗜好と化していて、政治の世界を公認の賭博場のようにみなしている。「士人」――いわばエリートたち――はこの賭場に必ず出席して駆け引きを楽しまねばならないと考えている。羯南は、西南人の「家庭教育」では「人を見たら泥棒と思え」「油断大敵」などのことわざによって子どもを幼時から「薫陶」しているのではないか、とさえ言っています。

そして、彼の判断では、西南出身の人々が維新以降に世に出た理由も、西洋の進んだ「新智識」を修得したためではなく、逆に「旧慣の保守」にある。九州人の「進取の気象」についての先の批評と同じく、ここでも、世上にいわゆる「進歩的」な資質なるものにたいして、皮肉な観察がされていることがわかります。西南人は「功利の念に強きを以て、又た権略術数の謀に長ずるを以て、其の権力を博したるなり」というわけです。先輩に引き立てられた西南人の後輩たちも、「残忍酷薄に近き種々の権略」によって政界で活躍しているのだそうです[3)4)]。ともかく、こういう次第で、散々ないわれようです。

以上のような対比や観察が羯南の言うように本当に中立的なものといえるのかどうか、九州人・西南人ならずとも疑問なしとはしないのではないでしょうか。しかし、その一方で、後にふれるポイントにも関係して、いかにも彼らしい見方だと、私は思います。

こうした羯南の見方とよく似たものは、やはり薩長の「藩閥」勢力と対峙した同時代の思想家の一人で、高崎出身の内村鑑三にもみられます。内村も、明治三十年四月に――ですから、先の「奥州人と九州人」のわずか一カ月後ですね――『万朝報』に連載した「胆汁数滴」という論説の中で、「東北対西南」と題して、「西南の士は、怜智に長けて不実なり。東北の士は愚鈍なれども実直なり」と言っています。彼によれば、西南人が日本の政権を掌中にして以来、愛国論と尊王論を利用してきたが、民権は挙がらなかった。関東以北の人は、「正義と忠勤との仮面を被りて投機商の親玉となる」ようなまねはできないが、民権の振興には東北人の力が必要だ、というのです[5)]。ただし問題なのは、この論説で、羯南が名指しされ、東北出身なのに松方内閣を弁護したとして、「東北の不正児」、「西向して……降将軍となる者」の一人に数えられていることです[6)]。まあ、このあたりは、羯南が一本気な内村による時勢批判の爆発のとばっちりを受けたというところでしょう。また、同年五月の英文論説では、「福沢拝金宗、肥後偽善、薩摩貪欲等々、あらゆる種類の怪物が出てくる「九州の海」」といった一節もみられます[7)]。

内村は、肥後熊本出身の政治家などとともに多分にキリスト教・プロテスタント、具体的には主にいわゆる熊本バンド系の人々ですが、こうした人々に関して、肥後人の習性、

――彼はHigoismとも表現していますが――これをよくとりあげて痛罵しています。その趣旨は、今日の言葉では、肥後人は、権力と利益を志向する偽善的で卑劣な機会主義者（オポチュニスト）ないし同調主義者（コンフォーミスト）だと言いかえられるでしょうか。たとえば、明治二九年夏の有名な長編論説「時勢の観察」の中では、肥後人は逃げる敵を追うのが上手い武士だという批評を引きながら、「今日の日本人はみなことごとく肥後人と化したのではないだろうか！」と述べています[8)]。これは、日清戦争後の実利主義的な対朝鮮外交などを批判する文脈で言われたものです。先の「胆汁数滴」の「肥後人」と題した一節も相当に辛辣でして、肥後人は薩長政府に迎合して大義名分を宣伝することにおいて最も活躍した、としています。敗者を追うことに強い、とここでも言われていますし、さらに次のように述べています。「薩長政府は彼等をして尊王愛国の名義を天下に吹聴せしめたり。而して彼等肥後人は能く其職を尽し、日本全国は終に彼等の虚喝〔――いわば、こけおどしですね――〕に屈するに至れり。薩若し獅子にして長若し虎ならば肥はジャカルなりハイエーナなり」[9)]。「ジャカルなりハイエーナなり」というのですから、大変なものです。

ともかく、以上のような羯南らの九州・熊本についての評価からすると、私などは、今回のパネリストとしては失格で即退場勧告、ということになりかねないようです。

ただ、別に弁解というわけではありませんが、私は現在の仕事の関係で九州にいるだけで、東京や仙台にもそれぞれ十年以上住んだことがあります。それに、自意識としては、どこかの土地の人間というよりも「故郷喪失者」と感じております。

羯南や内村自身にしても、九州人や肥後人を十把ひとからげに排斥したわけではありません。じっさい、羯南だけをみても、その政教社関係の同志・門下の中には、福岡出身の福本日南、熊本出身の鳥居素川、池辺三山などという人々がおります。（まあ、それでも彼らにも権謀術数的な気質を羯南は感じとっていたのかもしれませんし、前述の論説を彼らが読んだとすればどう受けとめたのかというのは、興味のあるところです）。また、羯南とセットで私たちが学ばうとしている正岡子規、羯南の愛弟子といえる子規は伊予松山の出身ですが、彼の没後に羯南が表した文章は、ご存じの方も多いでしょうが、子規の「人格の超凡」をたたえたもので、先の「西南人」論とは対極的な内容です。（ただし、松山藩は徳川親藩だったので、例外扱いなのかもしれませんが）。

他にも、羯南は薩摩閥に属する元老の一人、松方正義――彼は先の二つの論説のときにいずれも総理大臣の地位にありましたが――その松方が七十歳となったことを祝う漢詩をのこしています[10)]。前述の品川にしても、長州出身ながら羯南をその雌伏時代から支えた人物で、『日本』新聞のパトロンの一人でもあり、彼らは一種の同志的な関係にあったといってよいでしょう[11)]。やはり『日本』のパトロンの谷干城は、藩閥中の反主流派とはいえ、土佐の出身です。

そして、何よりも本質的に重要な事柄として、羯南から学ぶ意義、彼の人柄や思想の価値は、パロキアリズム（parochialism）といいますか、地方根性、そうした偏狭さとは相いれないだろう。そのことに、皆さんもおそらくご異議はないでしょう。

前おきが長くなりましたが、そこで、私が大学院生時代から学んできて感じた羯南の

魅力、偉さについて申し上げてご参考に供したいと思います。あくまで私の受けとめ方であり、彼の魅力がこれからお話しする点に尽きるだとかそれらの点が最も重要だなどと言いたいわけではないということは、もちろんです。

ごくおおざっぱに言うと、私の場合、「古くて、右寄りのなじみにくい人」という最初の羯南イメージが変わって、その魅力、偉さに眼を開かれていった、そうした事情を述べてみます。ただし、私の羯南像といっても単なる主観的な印象ばかりではないように思います。そこで、羯南と実際に接した人々の感想や批評の内で内容的に関連するものも、以下では適宜紹介することにいたします。これは主に陸羯南全集の第十巻からの引用が多いのですが、それでも、これまで言及されることの比較的少なかった資料が含まれていると思います。

以下では、羯南の魅力として四つのこと、すなわち、（一）その文章と人柄、（二）リベラルさないし寛容、（三）視野の広さ、（四）理想への固執による自立ないし独立、についてお話しします。ただし、これらはたがいに密接不可分なものです。

(一)

第一に文章と人柄、その内の先ず文章についてですが、私が羯南の書いたものを読みだした当初は、同じ明治の思想家である福沢や植木枝盛、徳富蘇峰などとくらべても、さほどおもしろく感じられませんでした。この点は、私の読解力の貧しさのせいもありますが、羯南と同時代の青年たちも同じように感じたことがあるようで、長谷川如是閑や丸山幹治――あの丸山眞男先生のお父さんですね――もそんな趣旨の回想を残しています。

これについては、この度、青森近代文学館の特別展の図録に書かせていただいた文章でも一部とりあげました[12)]が、たとえば丸山幹治の言葉を引くと、「日本新聞在社当時の青二才の僕には、……何だか湿りの足らぬ、刺激の足らぬバサバサ乾からびた文章のやうな気がした」、「若い時は先生の文章にも余り親しめなかった。……寧ろ小才の迸つた文章に心酔し、厚化粧の田舎娘みたやうな詞藻に感服してゐる程度の幼稚さ」だった[13)]などと言っています。しかし、「その後幾歳を経て、初めてあの洗練し切つた、無駄の一字もない、引き緊つた文章の値打を評価しうるに至つた」のだそうです。

実は、丸山眞男氏もまた今から四十年前に、羯南をテーマとした座談の最後の発言として、次のように言っています。「要するに羯南は、絢爛としたところとか、ハッタリで鬼面人を驚かすところがないから、じっくりと、ていねいに読まないと、おもしろさが出てきませんね。その意味じゃ、……現代のインスタント文化の風潮には合いそうもないので、みすず書房のためにも、ひそかに心をいためているんです（笑）[14)]」。

小才のほとばしる文章、とか絢爛としたところ、鬼面人を驚かすようなハッタリ、というと、羯南のライヴァルだった、平民社の指導者、徳富蘇峰の著作もその一例ではないかと私は想像します。

私の場合は、論文を書くために羯南全集を毎日読んでいたので、その文章の魅力に気づくまでに、丸山幹治のように数年もかかるということはさすがにありませんでしたが、数か月くらいは要したようです。羯南の端正な名文の著作としては、テキストの紹介は略しますが、『近時政論考』などが代表的な例と思います。

さて、「文は人なり」と言われるように、こうした文体の特徴は、羯南その人の人格と対応しているようです。彼の没後に表された関係者の回想からそれが知られます。丸山幹治や佐藤紅録は羯南の目が光って恐かったと書いていますが[15]、これはむしろ羯南の印象としては例外的で、それよりも、羯南の風采は豪傑風ではなく地方の村長ないし塾長のようなもの、質素で朴訥だったとしている人が多い[16]。そして大半の回想は、その高潔さ、清廉を挙げると同時に、羯南の厳しさよりも、大記者にして社長らしからぬ、親しみやすさ、心の優しさ、広さ、作為のない情の深さを強調している。交際においても君子の交わりは水の如し、という言葉が当てはまったと評されています[17]。

同志の一人、三宅雪嶺は、羯南の言わば自然な高潔さについて、「自分が清廉だとか自覚して強て遣つて居るのでは無い、天成(ママ)斯う生れ付いて自ら知らず、自然に潔白で謹厳なのだから一層立派に見えた」としており[18]、的確な評価だと感じます。羯南の文章をしばらくていねいに読み続けていくと、読者はやがてこうした著者の希有な人格に接することができるのではないでしょうか。

(二)

二番目に羯南の寛容な精神について述べます。回想の中には、高圧的・命令的でなく、真情にあふれた親切で心の広い羯南の対応に感激したというものがひじょうに多い。それは、羯南に率いられた日本新聞社の、ほとんど奇跡的にさえ感じられる独特の雰囲気、つまり、長谷川如是閑などがいうように、羯南を社長ならぬ「翁」「陸さん」と呼び、彼の人格への自然な心服にもとづいた、いわば同志的な結びつきに支えられた自由闊達な社風としても現れていたわけです。

正岡子規も羯南の人徳を讃えていますが、こうした羯南の精神を伝えるものとして、ここでは、子規のいわば高弟で子規全集の編纂や子規庵の再建に献身した寒川鼠骨の言葉だけを挙げたいと思います。これは、子規にくわしい方ならとっくにご存じでしょうが、私も含めた素人には必ずしも知られていない一節と思いますので。それによると、羯南は「慢性の伝染病」――結核ですね――そのために「近づく人さへ無かった」子規の「手を確(しっか)と握って」慰め、子規は「感激の余り一層声を立てゝ泣いた」とあります[19]。これなど、正にヒューメインな真の情の人としての羯南を示しているでしょう。

同じ文章で、鼠骨は、羯南の人となりについて、こう言っています。

「誰れにでも情味の籠つた温雅な態度で応対せられる」

「〔――羯南との面会以前に無名の書生であった鼠骨はそれまでに松方正義ら多数の名士らに面会して議論をふっかけたりしていたようですが――〕全然所謂大官名士とは其型を異にして、吾等青年をも丁寧に取扱つて、少しの驕矜らしい〔――つまり、おごりたかぶった――〕厭味な態度が無く、物の言ひ方から体のこなし迄が何となく自然で自由で、対手の私をして微塵も気をつまらせるやうな事がない」

「人々の自由を十二分に尊重された」

「自ら義務的ではなく献身的であった」

ここでは、再三、自由ないし自然という形容がされているのが印象的であり、それは先の雪嶺による評価とも重なっています。

自由主義者を指す英語のリベラルという言葉には、形容詞として、もともと、心が広いとか気前が良いという意味があります。他者にたいする寛容というリベラルの意味とつながってくるわけです。

ところが、リベラルを日本語で自由主義的または自由主義者と訳すと、自由主義という特定のイズム、主義、またはドグマを信奉するかのような響きがあります。たとえば、この日本でも最近まで時流に乗ってこの世の春を謳歌してきた観のある経済学上の自由主義者は、市場での自由競争という原理に帰依する立場のようです。しかし、政治的な自由主義では、さまざまな思想にたいする寛容が眼目を成す。そして、その寛容は体系的な思想、いいかえればイデオロギーや理論の問題だけではなく、それに劣らず、あるいはそれ以上に、日常的な態度・意識の次元でどう発揮されるかということも重要です。

こうした観点からみると、羯南は自らを自由主義者とはしませんでしたが、鼠骨たちが言うように、他者の自由を尊重し、また自分の立場からそれ以外の思想を公式的に裁いたりする傾向が乏しかった。その意味で、政治的な自由主義の精神をよく身につけていた面がある、と感じられるわけです。

私の大学院時代の羯南論では、羯南の逆説的な思想的展開の解明ということが中心的な課題でした。つまり、日清戦争後の「国家主義」ブームの下でかつて「自由主義」を掲げて政府と対立した政党さえもが国家的な立場を名目に政府と協力ないし癒着していった。それにたいして、元来は保守的な羯南が、今や時代遅れとされている「自由主義」の再生復活を要求して政府・政党を批判する論陣を張った。このことをどう理解するか、という問題です。

先の「九州人」論では、「政治上より批評するときは、奥州人は自由主義に適当すべく、九州人は圧制主義を便利とすべし」と言われています。かりにこれを羯南の自負として読むことができるとすれば、たしかにそう言えるだけのことはあったと、私には感じられます。

言いかえれば、自称自由主義者たち以上に自由主義の本質的な要素の一つを羯南がわかっていたのではないか、と考えることができる。理想への固着と結びついたリベラルな精神が、その要素に当たるわけです。

私は、羯南の著述を読みながら、彼のこうしたリベラルな精神、そして後に述べますが、それを支える確固とした理想主義的な価値に共感したわけです。それまでは、やはり「日本主義」あるいは政教社グループの「国粋」主義という言わば反動的なイメージやそれを具体化した発言についていけない、という思いの方が強かった。それは部分的には残りましたが、羯南のリベラルさと一貫性という特質に段々と目を開かれ、敬意を覚えるようになっていきました。

羯南には、日本主義者としてまた時代的な制約からしても不寛容な面があります。だが、寛容の精神をよく身につけていたところもある。しかもこの精神は、近世の西洋文化の精髄といえる[20)]と私は思いますが、日本では根づきにくい傾向がある。その上に、世界的にみても今日、いわゆる「文明の衝突」などが喧伝され、とくに九・一一以降に寛容の精神は欧米でも危機に瀕しているようにみえるのです。

(三)

三番目に、羯南の視野の広さというか西洋思想を積極的に学んだということにふれたいと思います。羯南は明治の知識人でしかも日本主義者なので、彼の和漢の素養が質量ともに現代の私どもの及びもつかないレヴェルのものだということ、――それ自体は、驚嘆こそすれ、意外だというわけではありません。けれども、西洋思想との関係については、一昔前はフランスの思想家であるドゥ・メストルの著述を訳していることから主にメストルとの関係が注目されがちで、羯南の旺盛な勉強にもとづく視野の広さということは、必ずしも十分に気づかれていなかった。羯南研究におけるそんな問題は改善されてきたものの、今でも一部にあるようです。これは、日本主義者・保守主義者というイメージがそうさせてきたのかもしれません。

しかし、羯南の書いたものを、よく読んでみると、西洋仕込みのいわゆる「新智識」として喧伝されたものや軽薄なハイカラに批判的であった――それは、先の「西南人」論にも現れていました――その彼が、実は相当な西洋学者であった。すなわち、――西洋文学ではデュマやモリエールの作品、つまりフランス語の原著を愛読したとも言われていますが[21)]、――西洋の社会科学、フランス・ドイツ・イギリスなどの、法学・政治学・経済学が多いわけですが、これらの分野の第一級の学者・思想家たちの、主にフランス語・英語のさまざまな著作、これらの原書を貪欲に、といえるほど熱心に読んでおり、その成果を社説でも用いている。こうした勉強は、法学徒・官僚時代、つまりほぼ青年時代といってよいでしょうが、その時の素養が基礎となっているのでしょうが、それだけではなく言論人・社長として多忙な生活を送るようになってからも、やはり行なわれているのです。

しかも、こうして読んだ西洋の法政思想をたんに祖述紹介したり直訳的に適用したりするのではなく、直面する日本の現実の条件に照らして、消化し活用しようとしている。その点で、今でも日本に多いであろう輸入学問的なやり方と違って、主体的である。たとえば、『国際論』という彼の作品は、国際政治学という学問的な分野がまだできてもいない時期に表された西洋の先駆的な国際政治論の著作との知的な対決の産物でした。

その著作の著者は、ウクライナ出身のロシア人で、実業家としての仕事のかたわら、社会学の研究者・著作家としてフランスなどで活躍した、国際主義者であるノヴィコフという人です。一八八六年に刊行された、彼のいわば出世作、フランス語で四百頁余りの著作を羯南は読んだのです。これを熟読して、その概念装置、すなわちノヴィコフのいわゆる「国際競争」の類型論を用いながら、日本の置かれた列強との関係を分析し、その上で日本のとるべき行動、具体的には条約励行論という政策を提唱するにいたったわけです[22)]。

こうした羯南の勉強ぶりを伝える資料を一つ引きますと、彼が亡くなってから三日後に『国民新聞』に出た記事では、羯南は、「家にありては非常の勉強家にて盛に内外の書籍を買入れ、手に従つて繙読するを何よりの楽み」とした、とされ、さらに次のような事実が紹介されています。すなわち、「在外の某氏よりブロツホ氏の戦争論を送られし時の如きは、新聞の論文をば自宅より送り、家に閉籠りて厖然たる数冊を数日の中に読了したる程なりき」と[23)]。

この『戦争論』の著者は、イヴァン・ブロッホという同時代のポーランド系のロシア

人銀行家・鉄道企業家で、彼はやはりアマチュアとして平和研究を行ない、世界最初の反戦平和の博物館の設立を企てたことでも知られています。ノーベル平和賞の候補者にもなったようです。その著作『戦争論』は、ロシア語で一八九八年に、またそのフランス語訳は一八九八年から一九〇〇年にかけて出版されています。羯南はおそらくフランス語訳を読んだのでしょうが、これは、全部で六巻、一九七三年の復刻版では、一つの巻が分量の少ないものでも四百頁近く、多い巻では七百頁以上にもなる、そういう長大な作品です。『近時の戦争と経済』という日本語訳も、一九〇四年に民友社から刊行されています。これは、英語の縮訳版からの重訳のようです。『戦争論』の内容は、産業革命以後の戦争が大規模化し、軍事的な膠着に陥りやすいとともに当事国の財政的・社会的な破綻を導く趨勢にあり、外交の手段としてはその意味を失うだろうと主張したもので、日本では後に安部磯雄もその趣旨を援用しています。

国文学者で歌人の池辺義象、――これも肥後の人ですが、――によると、彼が留学に出発する際に、羯南は別れの杯とともに次の助言を与えたそうです。「君、海外にゆかば、その風俗人情の非なるに目を注がず、その尤も善良なる処を探り来れ」[24)]。この言葉は、羯南自身の西洋社会科学の摂取のあり方を考えるうえでも、参考になりそうです。

ともかく、羯南の広く主体的な勉強ぶり、それが同時代においてどんな政治的な意味および知的な意味をもっていたか――こうした点について考えるということが、時期としてはとくに大学院を出て教師になってからの私の勉強の一つの焦点となりました。

（四）

今申しました羯南の勉強ぶりとレヴェルの高い著述が示すように、彼が学識の豊かな人だったことは、まちがいありません。ただ、それ以上に重要な、羯南の本領、彼の彼たるゆえんとさえいえるほどの意味をもつだろうものが、自らの理想に彼がしっかりと固着したということで、これが私が四番目にお話ししたいポイントです。

このことは、羯南の他人にたいする評価、そして自己評価の基準としてはっきりと出てきます。彼自身の場合、たとえば同郷の伊東重（舜山）への書簡の中で、人間は才能や学問ではなく「義理」が最も大事だとして、浅学非才な自分もその点を自覚しているという趣旨のことを強調しています[25)]。また、他者にたいする評価でも、彼は軽薄才子を嫌い、徳ないし「気」が大事だという発言を何度となくくり返しています[26)]。先にふれました、子規の言行録に寄せた序文も典型的な例で、羯南は、子規が病身でありながら短期間に大きな仕事をしたのは、「学問芸術の力ではなく、全く其の人格の超凡な証拠である[27)]」としている。またそこでは、より一般的に、「一芸に秀いでた人は、その芸の為めに全体の人格を掩はれて仕舞まつて、只芸だけを以て世に持て囃され」がちな傾向があるとして芭蕉・宝井其角などもその例だとしています。そうではなく、優れた人格にこそ着目すべきだ、と羯南は言うわけです。これは、子規の高弟の一人、石井露月も指摘した通り、羯南その人についてとくによく当てはまる言葉と言ってよいでしょう[28)]。

羯南が最も大事だとした彼のいわゆる「義理」ないし「道理」とは、人間の人間としての倫理・理想と言いかえられると私は思います。こうした理想を青年羯南がどれだけ重んじていたかということを示す興味深いエピソードがあります。先の〔竹田氏の〕お話にも出ました拓川、すなわち、子規の叔父にして羯南の親友であり、後にベルギー公

使や松山市長などをつとめた加藤恒忠の伝えるものです。それは司法省法学校の学生時代、拓川によれば明治十年ころだそうですが、羯南と加藤をふくむ数名の同窓生が旅行中に訪れた千葉・市川でいたずらのような事件に巻き込まれて、罪をかぶった羯南と加藤が犯罪容疑で警察に拘引された。幸いに、警部（補）くらいの身分の署長はわけのわかった人だったので羯南らを信用し、彼らが誤証（あやまり）文を書くことを条件に、一晩だけの（未決）勾留、つまり留置場＝豚箱入りの後に解放してくれた。ところが、羯南らが司法省法学校に戻ってから、この話を聞いた薩摩出身の植村という校長が、拓川たちが誤証文を書いたことを嘲って、「警部や巡査輩に謝るとは何事だ。そんな無気力な男では大事は出来ない」と言って彼らを叱りつけたのだそうです[29)]。この校長の言動は、いわば当時の日本の「時代精神」の現れとして、俗物的な官僚、とくに藩閥出身の官僚が大人物気取りで威張っていた様子を、生き生きと伝えています。

この校長の叱責にたいして羯南は、「火の様に怒」って、次のように激しく反論した。自分は自分が悪ければ巡査でも車夫――車引きですね――でも乞食にたいしてでも謝るし、悪くなければ、太政大臣にも司法卿にも――今風にいえば首相にも法務大臣にも――謝らない。その道理は、例の『孟子』の一節、孟子が孔子の言だとされるものを引いて勇気について語ったこと、すなわち自省して自分が正しくない時はみすぼらしい卑しい人間をも恐れるし、（逆に）自分の正しさに確信があれば反対者が「千万人といえどもわれゆかん」とした[30)]のと同じことだ。「あなたは此方が悪くても相手が微賤の者ならば、非を通して剛情を張るのを気力と仰しやるならば、私共は無気力たるを安んじます。一体気力とは何物か承りたい」――と、このように迫って、校長を閉口させたのだそうです。いかにも羯南らしい、彼の面目躍如というべきエピソードだと思います。

なお、この植村校長との面会の後に、羯南は彼のことを「あんな野蛮人は人の上に立てぬと軽蔑して居た」とされています。その「野蛮人」という評価は、先に紹介した羯南の「西南人」「九州人」論と通じているようです。

羯南は、その言論活動の最初期である、『日本』発刊の二か月前の論説、国民主義と東北人との関係を論じた「国民旨義及び東北人士」でも、人間は単なる「事実上」「物質上」の生物ではなく「理想上の生物」でもあるのだから、政治力や経済力という事実の力をもつものが支配し驕慢にふるまうことは正当でなく長続きもしないのだ[31)]、と力説しています。こうした“哲学”は、他の著作でも彼がくり返し何度も論じたところです。

権力や利益に追随する、迎合する、それによって正義ないし道理をふみにじるということは、羯南の基本的な理想の対極を成す。したがって、彼は保守的な思想家でありながら明治政府に同調しないどころか、激しい言論弾圧さえ受けた。そしてまた、その理想を保った結果、日清戦争後に政府と提携抱合した政党勢力をも批判して、ある意味で政界で最も自由主義的な位置に立つにいたったわけです。

そして、こうした理想を固守する姿勢、その節操という点に、私は学問的にも一人の人間としても共感しまた敬意を抱きました。

まず、私の研究者としての修行時代の勉強との関係で申しますと、当時、実証主義的・科学主義的な見方をどう位置づけるかという問題がありました。つまり、政治学とは何かということについて、政治がどうあるべきかという規範や理想、そのことにたいする

人々の意識や思想よりも、権力や利益によって政治が動くという現実とそのメカニズムを捉えるべきだ、それこそが学問ないし科学としての政治学ないし社会科学だ、という主張が幅をきかせていました。こうした見方からは、思想や理想というものは言わばお飾りか添えもののように軽く扱われがちなわけです。

確かに単純な理想主義は、あるいは思想の役割を大げさに言うことは、リアルではないですし、理想が現実を変えてほしいという願望的な思考（ウィッシュフル･シンキング）からそう信じようとするようなことは、むろん学問としては間違っています。けれども、私には、今述べたいわゆる実証主義的・科学主義的な社会科学観というものは、思想への鈍感さや没理想的な時代状況への追随と結びついているように感じられました。さらに後には、客観的・中立的だと自称する実証主義が、実は実証的・没価値的な分析にとどまっているのではなく、しばしば無意識のうちに分析を踏み越えて価値判断をしている、つまり既成事実を正当化し、多様で流動的な現実の中の一つの傾向を固定的・支配的なもののように扱いがちである、との問題に気づきました。そのことを羯南も指摘していた、といってよいでしょう。そして、こうした傾向は、日本社会のいわば体質的なものとしてあるのかもしれませんし、とくに今日では学問のみならずジャーナリズムなどの世界でも、そして一般の人々の意識においても、いっそう強まっているような気がします。

じっさい､羯南がその著述の中でしばしば強調したのが､｢事実｣と｢道理｣ないし｢理想｣との区別であります。この点に関連しますが､私の羯南論を権力批判の活動でも知られる､ある歴史学者に送ったことがあります。その返礼の中に、その方が青年時代に新カント派の哲学から存在（ザイン）と当為（ゾレン）の区別を学んだ、――そのカテゴリーによって歴史を価値化する国家主義のイデオロギーを批判する視点の一つを獲得されたのですが、――そのことの先例が羯南にみられるのではないか、という趣旨が書かれていました。もちろん、新カント派の枠組と羯南のいわゆる「事実」と「道理」という区別とを単純に同一視することはできません。しかし、とくに、既成事実の批判、既成事実の正当化との対決という、日本の思想史ではこれまで比較的弱かった側面、――その面での共通点に着目しながら、それがどの範囲でどのように作用したのか、などの観点から、それらの思想を比較検討するのは興味深い課題だといえましょう。

そして、私が羯南から教えられたのは、彼の新聞記者論にも示されているように、自らの理想ないし信念に固着しそれに縛られることによる独立、言いかえれば、そのことにより大勢や権力、あるいは俗論的な多数意見に安易に同調しないということです。

この関連で、本にも書いたことですが、日本主義者の羯南が、同時代の国民の大勢順応主義を痛烈に批判している[32)]のが、私にはとくに印象的でした。憲法発布式などでお祭り騒ぎをした国民が日清戦争の勃発や戦後の政治状況の中で、昔のことをけろりと忘れて立憲主義の精神が形骸化するのを許している。たとえばかつて民権のために命をかけたはずの政党政治家たちが敵であった政府と手を握るばかりか、国家のためという理屈を掲げて国民の自由・権利を侵すような政策をも進めている――羯南の表現によれば、彼らのこうした「軽薄」な「反覆」ぶりの指摘は､問題の核心を衝いていると感じました。

そして、私個人のことですが、研究中心の修行時代を終えて新米の教員として地方の

大学に赴任して、いわば実生活を始めるなかで、大学を含む日本社会におけるボス支配や閉鎖性、イデオロギーの別や有無を問わない同調主義・集団主義を、ささやかながら体験したり見聞きすることがありました。その意味では羯南や内村の九州人批判には私も共鳴するところがありました。（これらの現象は九州に限られる話ではないでしょうが。）そして、自らの出処進退との関係でも羯南からは学ぶものがあると感じて、勉強の意欲を刺激された次第です。

先に、羯南の寛容の精神ということを述べましたが、その寛容も、丸山眞男氏も『日本の思想』などで指摘したように、日本によくあるようなナアナア主義というか八方美人的なものでは、寛容ならぬ無原則の相対主義になるのではないか。そこでは少数者が尊重されないのではないか、という問題が生じます。羯南自身が徹底した寛容の精神をもっていたとまではいえませんが、しかし、人間性に関する理想を信ずる、あるいはそれにこだわるからこそ、相対主義に陥らずに独立を保ち、しかも一定の寛容の精神を発揮できた面があるように思います。

結びにかえて

欧米諸国の中でもイギリスは、歴史的な著作に長けていること、とくに評伝の豊かさで有名です。そのことと関係して、かの国の歴史家は人間を見る目が肥えている、とされます。そのイギリスでは、ある人間を本当に知るためにはその人の生涯と同じだけの時間をかけるべきだ、ともいわれるようです。こうしたものの見方からすれば、たとえば数年やそこらで羯南論をわけ知り顔に書いてしまうようなことは、不遜で論外だというべきでしょう。その点で私自身の勉強もまだひじょうに不十分なところがあります。

じっさい、羯南が「冷熱の反覆」とか「軽薄病」と述べたような国民の気風、それにたいする彼の批判に照らすと、歴史から学ぶことの苦手な私たち日本人の姿が浮かび上がってくるようです。つまり、目新しい思想や流行にはひじょうに敏感でそれなりの消化力もあるが、原理的なことがらをじっくりと追究し続けて深く理解体得するという姿勢が乏しく、すぐにもう古くさいとして批判したり、あるいは単純に忘れ去ったりする。こうした日本国民の傾向、逆説的にいえば、新奇なものにばかり目移りして深く学ぶことが乏しいという、実は古い傾向――羯南は自らの理想のゆえに、孤立も恐れずに、この根深い問題と対決したのではないでしょうか。

その点に関係することなのですが、実は私は今回、このフォーラムのパネリストをつとめよ、とのご依頼を引き受けるべきかどうか、躊躇するところがありました。それは、一つにはとくに近年は羯南の勉強から遠ざかっていて、自分の能力・資格という面ではたして適任だろうかと考えたためですが、もう一つの理由は、今回の催しの趣旨についても心配があったからです。

すなわち、羯南を勉強してきて、私は、権力と時代とにたいする緊張を保った羯南と、官民一致の顕彰ということとは何かそぐわない感じがしています。そして、以上に述べたような私の羯南理解が正しいとするならば、よそ者がこのように言うのは大変僭越で失礼なのですが、今回の羯南生誕百五十年・没後百年の催しが、一時のお祭りといいますか、地域起こしのきっかけというようなことに終わりはしないか、ということが気に

なるわけです。

そして、こうした懸念を口には出しませんでしたが、抱きつつ、青森近代文学館の櫛引室長と電話でお話ししたところ、櫛引さんが「今回の催しは、これで終わりというのではなく、今後も羯南から学び続けていくきっかけにしたい」と、このようにはっきり言われました。これをうかがって、それなら筋が通るし、私も同じ趣旨から聴衆の方々のご参考になることを若干申し上げられるかもしれないと思ってお引き受けした次第です。

羯南は、同じ明治の思想家でも、たとえば福沢諭吉や内村鑑三などにくらべると、思想的なスケールや深みという点では見劣りがするところがあるかもしれません。また、私もそうだったように、彼の文章は慣れないうちは読みにくいかと思います。しかし、そこを我慢しながらつき合って行くと、だんだんとその良さが伝わってくる、そして彼がなかなか魅力的で学ぶところの大きい人であることがわかるだろうと思います。

底の浅い一過性の羯南ブーム、――羯南の表現を借りれば「熱躁」――ではなく、イギリスの歴史家が言うように、じっくりと時間をかけて羯南から学ぶ営みが今後この地で根づいていくならば、彼も本望でしょう。そうなることを念じて、私の拙い話を終えたいと思います。ご静聴を感謝します。

＊　本稿は、二〇〇七年九月一日に弘前市で開催された「陸羯南生誕百五十年没後百年記念フォーラム」において筆者が話した内容に、加筆し補正を加えたものである。なお、他の講師・パネリストは次の方々であった（敬称略）。復本一郎（神奈川大学教授）、鎌田慧（ルポライター）、竹田美喜（松山市立子規博物館館長）。

注

1）『陸羯南全集』第九巻、一九七五年、みすず書房刊、四八〇頁。全集からの引用は、以下ではⅨ480のように引用箇所を略記するとともに、適宜句読点を補った。なお、引用中の〔 〕内の語句と「……」は、それぞれ引用者による補足と省略を示す。

2）『日本人国記』と当論説では記されているが、正確には『人国記』で、『人国記』には旧・新二本があり、羯南がいうのは後者である。これは、著者・成立年代とも不詳の旧本をもとに関祖衡が改作して元禄時代に再刊した著作とされている（浅野建二校注『人国記・新人国記』一九八七年、岩波文庫、の「解説」を参照）。

3）Ⅲ420・422　など。

4）ただし、羯南は、「勝者の風俗は敗者を陶化す」と言われるように、維新後は西南人の気風がそれ以外の地方にも普及しつつある、としている（この点でも、後に引く内村の見方と似たところがある）。だが、その場合でも、権略と駆け引きの諸技術を学ぶうえで他地方の人たちはその「固有の気質」に妨げられ、「其の最も巧なる者も反て西南人の基督教信者にすら遠く及ば」ないのだ、としている（Ⅲ421）。

5）『内村鑑三全集』第四巻、一九八一年、岩波書店、一二四頁。

6）同前、一二九頁。

7）亀井俊介訳『内村鑑三英文論説翻訳篇』上巻、一九八四年、岩波書店、一三二頁。

8）内村全集第三巻、二三三頁。なお、金森通倫・徳富蘇峰・横井時雄などの同志社の指導層たる「肥後人」にたいする明治三一年春の批判として、たとえば『内村鑑三英文論説翻訳篇』下巻、四六－五一頁（そ

こでの「ラッパ吹き」との「肥後人」観は、「胆汁数滴」のそれと重なっている)、関連して、約一年後の長編「キリスト教を捨てた著名な日本人」(同前、一五六－一六七頁) などを参照。

9) 内村全集第四巻、一三三頁。

10)「賀松方伯七十」。X199。高松亨明『陸羯南詩通釈』(津軽書房、一九八一年)一五五－一五六頁。ただし、松方が「明治十七年、七十歳の時伯爵を授けられた」との同書の記述は、不正確。授爵の時期はその通りだが、松方が七十歳となったのは明治三八 (一九〇五) 年であり、この詩はその頃の作品であろう。

11) じじつ、品川の辞職の翌日 (三月十二日) の論説「品川子退職」の末尾で、羯南は「其の勇往勇退の状は反て子〔＝品川〕が性行の率質正良なるを世人に証するに足る。古に日く、過を見て斯に仁を知ると。吾輩は品川子に於て亦た之れを言ふ」と述べている (Ⅲ428)。翌日の論説も、品川の責任感を称揚し、大臣の職に不可欠なその資質を備えた政治家は希少だと力説している (Ⅲ428－430を参照)。ただし、選挙干渉の措置そのものについては、羯南は擁護しておらず、むしろ批判的だったようにみえる (とくにⅢ430－432を参照)。

12) この特別展「陸羯南と正岡子規」は、二〇〇七年七月一四日から九月九日まで開催された。拙稿「「日本」新聞と陸羯南の「国民主義」」を含む図録は、インターネット上のPDF文書 (http://vww.plib.net.pref.aomori.jp/top/images/katsunan/WEB.pdf) として公開されている。

13) X281・283。

14)「近代日本と陸羯南」、『みすず』一九六八年一〇月号 (『丸山眞男座談 7』岩波書店、一九九八年、二四一－二四二頁、所収。)

15) X283。

16) X273・268・309など。

17) X217。

18) X209。なお、雪嶺は羯南に成功の跡があるとするなら「新聞記者として成功」したのであり、失敗したとすれば「新聞屋として失敗」したのだとも評している (X213)。

19) X259以下。

20) ディーター・ゼンクハース著、宮田光雄他訳『諸文明の内なる衝突』(岩波書店、二〇〇六年) を参照。

21) X209。

22) 参照、拙稿「明治中期の「国際政治学」―― 陸羯南『国際論』とNovicow J., La politique internatinoaleをめぐって」『法学』第五九巻六号、一九九六年。

23) X207。

24) X221。

25) X3。

26) 一例として、Ⅸ607－608など。

27) Ⅸ666。

28) X247。

29) X249以下。

30)「自ら反みて縮からずんば、褐寛博と雖も吾惴れざらんや。自ら反みて縮ければ、千万人と雖も吾往かん」(『孟子』公孫丑上)。

31) Ⅸ596－598。

32) 拙著『国民・自由・憲政―― 陸羯南の政治思想』(木鐸社、一九九四年)。とくに第二部。